

日高・ヒマラヤ・カナディアン・ロッキー

石 崎 貞 子



ヒマラヤ日記より

「一月一日 午前三時起床。四時出発。凍りついた暗やみヘラテルネをつけて出る。雪少なく、かなりのブッシュ。一、九七一m降までゆくが、時間ぎれで引き返す。風強く視界なし。スキートの降りはブッシュの中を苦労する。往復十時間。すき間風吹くがらんとした飯場の中にテントを張り、元旦の夜をサメ夫妻心ずくしのちらし寿しで祝う。明日の行動にそなえてはや寝。」

これは北日高のピバイロ岳で明けた、今年の山日記の一ページである。今年もかく山で明けた私であるが、ダケカンバやタンネの木が点々と生えて、日高にしてはおだやかな尾根を登ってゆきながら、私は昨年の元旦の頃のことを思い出していた。

「十二月三十日 六時起床。アンナプルナ連峰が朝焼にそまって美しい。ポーターがぞくぞくと集まってくる。雇ったのは十五人。何人かがあふれてすごすと帰っていった。一人三〇kg、一五ルビー(約三百円くらい)の契約。八時よいよキアラ、バンがはじまる。ポカラ街道のむこうにそびえるアンナプルナ連峰の白い山なみを背景にして、菩提樹、素足の子供達、のさばる牛の群、土壁の家とすべてが写真になる風景だ。サブザックを背に、写真を撮りながらワクワクと胸おどらせて歩く。全くいいところ。素晴らしいところ。昨日の買物で、すでに馴みのバザールを通りすぎる。

鋭くピラミダルなマチャプチャリやアンナプルナ連峰が常に私達の目を染まさせてく

れたが、午後には雲にかくれてしまった。村人達と誰かれなく「ナマステ」と両手を合わせてあいさつを交わす。まだ五カ月という赤ん坊を連れたイギリス人の若夫婦、一人歩きのアメリカ女性、二人連れのドイツ人などに会ったが、ここはまさに国際的な街道筋だ。いくつかの村を過ぎて、広い田圃の中を行く。三々五々と歩くポーターの群に混ざって、お互いにたどたどしい英語を交しながらネパール語を教えてもらう。でも、これはどうも聞くかたっぱしから忘れていってしまう。

今日のキアラバンは登りのないコースなのに、早足のポーターのおかげで、ももや足の裏が痛くなった。スイケットの茶店では、サーブ(旦那)たちは、色っぽい女たちの店にはいつて何やら楽しそう。キアラバン一日目のキャンプは開けた谷の中・マルパニに泊る。夜は焚火の囲りにシェルパもポーターも皆集まり、日本とネパールの歌の交歓会。ポーターの中にも歌の上手なのがいて、彼は皆の人気者になった。その名はガルバ・バハードル。彼の歌の中で印象に残ったのを教えてほしいと頼むと、仲間たちにヤンヤと囃され、はにかみながら彼は一小節ずつを何回も何回もくり返してくれる。

「ロキシイライカイヤ ランマラジャンマ アカコナージャレイ……」
皆で廻し飲みにしたチャン(どぶろく)にホロホロと酔い、燃えさかる炎をみつめながら、心に充ちあふれてゆくものを感じていた。

十二月三十一日 「ティ」と、朝の目覚めにミルクのたつぷりはいった紅茶がでてる。そのおいしいこと。ご気嫌の一日のはじまりのだが、あいにくと山は曇ってい

る。ビスケットに紅茶。軽い朝食をすませたあとは、八百mの登りがつづく。体調は良く、ポーターに合わせてゆつくりと登ると、呼吸の乱れもなく快調。ポーターたちととにかくと話しながら楽しく登り、いくつかの小さな村を過ぎる。ノードラではチェック・ポストがありピサを見せ、行先を告げる。隊長はネパリーに良く似ているせいか、ここをフリーパスで過ぎてしまいい、大汗をかいてもどってきて、大笑いとなった。

日中は二十七度とかなり暑い。尾根へ登ったと思うと、コーラ(川)へと降る。登ったり降ったりはヒマラヤの特長。アンナプルナ山塊の良く見える気持のいい場所。昼食。インスタント・ラーメンのおいしいことよ。競いあつてガツガツと食べる自分に、われながら驚く。キッチンボーイのカンツァは、上手に日本人好みの味つけをしてくれる。昼食は二時間くらいかけてゆつくりとする。今日はモディ・コーラ傍のビレタティ泊り。途中でポインセチアが真赤に色づき、花キリンの可愛らしい小花も見かけた。小鳥たちもじつに多く、明るい嘯りを聞かせてくれた。大晦日の今日を、せめて麺類で祝うつもりだったが、カンツァが米をといでしまったので糞芋飯と味噌汁にする。今夜も焚火の囲りで歌と踊り。チャンも四も買った。昨日のお礼に今日は日本の歌を教える。

「しょう、しょう、しよじよ寺、しよじよの月は

つんつん月夜だ……ボンポポボンノ、ボンポポボン」

最後の囃子で腹づつみを教えた。歌のほうは皆で覚えて覚えないのだが、ポポポコ……と腹づつみだけは覚えた。例のバハードルはさすがに音感すぐれていて、覚えのいいには感心する。隊長はビッケルを持って「黒田節」を踊った。

一月一日「メンサーブ・ティ」朝のまどろみは今朝もカンツァの声に目覚める。今日は明るく、からりと晴れ上がった青空。段々畑には菜の花が黄色の色どりをそえている。「おめでとうございませう」と、チビサーブが声をかけてくる。そういえば今日は元旦だった。でも緑の暑いここでは、どうもサマにならない。今日も急な坂道を登ったり降ったり。キャラバンの途中でコロコロと良く笑い娘さんの親子と道連れになり、ガンドルック村まで一緒だった。言葉が通じないので、手振り身振りに笑顔と楽しい道中。道端のあちらこちらにゴザラソウを見つけた。チュルテンの横を通り、釣橋を渡りながらヒマラヤにきたのだという実感をかみしめる。南アンナプルナとヒウンチュリ、それに頂が二つになったマチャブチャリが、だんだんと大きく近づいてきた。

ところで彼らの炊事には、すべて薪を使う。その薪は立ち寄った村で買うのだが、それを拾い集めるのは子供の仕事のようだ。五、六才くらいのごく小さな子供までが一生懸命に薪集めをし、大きな束を背負っていた。それに赤ん坊のお守りも子供の役目のよう、三つ四つの子供が、ひとまわり小さな赤ん坊を背負っているのを見たときは、痛々しい思いだった。ボカルの木賃宿では、皿洗い、掃除、洗濯とこれまた子供の仕事。ネパールの子供たちのそのかいがいい仕事ぶりには、ほとほと感心した。ガンドルックはいままで通り過ぎてきたどの村よりも豊かな感で、白壁のしつかりした家構えが多い。今夜は丘の上の、見晴しのいい学校の前に泊る。笛を持った青い目の青年が現われた。彼の吹く笛の音に合わせて、日嬢と副隊長が踊りはじめた。手拍子を叩き、ゆるやかに廻り、前へ後へと踊る二人。笛を吹くヒゲの若者。美しいシーンだった。』

△ △ △

七人の仲間たちと、アンナプルナ山群の一峰テント・ピークを過ぎしたが、高山病に倒れた隊長と、ヒマラヤ登山にしては短期間だった余裕のない日程が、その山への登攀を中途で断念させた。

だが約一カ月に近い山旅で、貧しくも素朴で親切なネパリーとの心に残る暖かな交わりを持てたことは、何よりのみやげだった。十二月から一月の乾期のネパールの空には、排気ガスや工場の煙などに汚染されていない澄みきった青空があった。そしてじつに沢山の種類の小鳥たちが明るく嘯り、のびやかに飛びまわっているのを見た。ビル工事、地下鉄工事で緑を切りはらい、公害という化物に自らの首をしめつけられているわが国に比べて、この国の緑豊かな自然に接することができたのは大きな喜びであった。不潔・貧困・低文化といわれる一面を見すえたとしても、私は白い神々の山と素朴な人々の住むネパールが好きだし、いつかはまた訪れたいと思っている。

カナディアン・ロッキーをたずねて

小鳥といえど、コロンビア水原でのキャンプの朝、小鳥の訪れをうけた。雀よりは大型な淡茶色の小鳥が、早朝の出発前のあわただしさのなかにどこからかふいにやってきた。三千mに近い雪と氷の白い世界に現われたその小さな訪問者を見て、私は感嘆の声をあげた。小鳥は人を警戒する様子もなく、パン屑などをついばんでいたが、こんな高

地に生息する小鳥への驚きと喜びを私の胸に残して、彼女はまたさりげなく飛び去っていった。

その後も、いろいろな小鳥たちとの出会いは、山を降りてペイト湖の草原の中や、ルイーヌ湖の木立の中へとつづいた。その小鳥たちは人間に近親感を抱いているかにさえみえた。小鳥ばかりではなく、動物たちにも多く会った。シマリス。和名はないそうだが、プレリィ・ドックというミンクの仲間。お尻のところの白いカモシカの群。長い角をくると巻いた山羊。名前は解からないのだが、山羊の顔をしている動物。大物はムース（ヘラジカ）の雄。と、いずれもハイウエーのすぐ傍で、ゆうゆうと草を食んでいた。人間から餌をもらっていたりするのである。

この八月、私は「北大山の会」の記念行事に参加して、カナディアン・ロッキーを訪れた。予定ではバンクーバーから展望車つきの大陸横断列車に乗ってジャスパー入りをするのだが、ストライキとあってエドモントンまで飛行機で飛んだ。その不満の變更が思いもかけずロッキー山脈の真上を飛んで、素晴らしい山岳展望をたんのうさせてくれたのだ。雪や岩の山なみを、黒い縞模様の氷河のながれを、大小に散る湖をと、さわめきたつ心をおさえて夢中でシャッターを切った。それはヒマラヤでの失敗に反して、われながら満足いくロッキーの姿をとらえていた。

早朝の深い朝もやのたちこめていたエドモントンから、どこまでもつづくかに思われる単調な大平原のハイウエーをバスはひたしりに走った。夕方ごろジャスパーに近くなると、岩壁に特有の横縞のはいったロッキーの山々が、針葉樹林をまよって現われはじめた。いよいよ待望のロッキー入りなのだ。

ブリティッシュ・コロンビアとアルバータの二州にまたがる広大なロッキー山脈の玄関口ともいえる山の町・ジャスパーにはマーケット、案内所、自動洗濯店、おみやげ店それにしようしやな貸別荘やモーターが、調和した美しさをもって建っている。スイスの美しさに勝るともいわれている原始のままの自然や山岳風景を眺めに、各国の観光客が大型自家用車やキャンピング・カーで集まってきた。また、それらの車にねらいをつけてピッチバイクをしようと、若者達がハイウエーのあちらこちらに立っている。

ジャスパーと南の観光地バンフとを結ぶハイウエーは、まさにカナダが誇る山岳自然美が展開する。コロンビア大氷原を源に各氷河をへて流れ集まった大河が、いっきよに

溪谷へと泡立つ白い飛沫を散らして落ちるアサバスカ滝。ボウ湖・ペイト湖・ルイーヌ湖等々の湖が、氷河をもった山々を背景にして、ヒナゲシの大群落のむこうに、針葉樹林の奥に、開けた草原の中にと、各様の色調やたずまいを見せていた。そして三千m以上のロッキーの山々が、ハイウエーに氷河の末端を落としてそそり立っている。

私は、ジャスパー、バンフ、カルガリーの各町のスポーツ店に、目ぼしい山の用具はないものかとはいつてみたのだが、山の物よりも釣の用具の豊富なのに目を見張った。そのくらいカナダでは釣が盛んだし、わがパーティーの中にもここまで魚釣りにきた人があるくらいなのだ。

私が感心したのは、美しい花を使つての巧みな演出を多く見かけたことだ。バンクーバーの住宅街で、庭に窓辺に手入れの良くゆきとどいた芝生にはえて、その沢山の花のあしらいは童画の絵のなかにあるような美しい住宅を、いっそうひきたてていた。それは、公園の中でもホテルの庭にも同様である。こうした花を愛する風習のなかに、清潔で自然保護に徹するカナダっ子の、なんとも粋な心意気を見る思いだった。

前記のハイウエーの途中に建つ、とても眺めのよいアサバスカ・シャレーを根拠地として、豊かな自然の中で絵を描いたり、野点をしたり、山登り、魚釣りなどと優雅に過すパーティーの人たちと別れて、私たちはマウント・コロンビアへと出発した。それはロッキー山脈ではロブソンに次いで二番目の高峰で、大氷原のかなたに白くそびえたつ三、七五〇mの山である。

生まれてはじめて踏む氷河の感激はいつしか、ずたずたに裂けた死の淵のようなクレバスへの恐怖にとつてかわり、きり立った両岸の岩壁からのたえ間なく落ちる落石や、その上に堆積した巨大な氷雪の崩壊が大音響を発生して雪崩れる音におびやかされた。

カナディアン・ロッキーでは最大の広がりをもつという大氷原、無際限にも果てしないくつついてゆくようなその氷原を太陽にじりじりと焼かれ、体中がしびれるような重い重いつつをゆすりあげながら、マウント・コロンビアを目ざしてひたすらな歩みを向けた。クレバスの少ない、おだやかなその氷原に点々と穴があいていて、蛾やチョウ、氷河虫の死骸があった。

登峰の日。明けやらぬ早朝、キャンプを出た。コロンビアの基部に近づく頃、モルゲンルートにそまつた山々が夜の眠りから立ちあがる。氷原のゆるやかな登りは、四五度

前後の雪と氷の急斜面へとかわる。それは六、七百mもいっきにつきあげて、青空の中に消えていた。ラッセルを交代しながら、スリップをしないよう慎重に高度をあげてゆく。みんなの激しい息づかい。私は高度のためか頭がしめつけられるように痛い。氷の斜面にでた。O副隊長がトップに立ってルート工作。カッティングされた氷の欠片が乱れとぶ。少しづつザイルは延びてゆく。ようやく青空の中に消えていた稜線の上にてた。

みんな無事に緊張の登高から解放されてほっとしたの間、雪は深くもものあたりまで埋まって、苦しいしごきとなった。やがて頂が見えてきた。白いおだやかな優しさ……。だが、のろい歩みも五歩とはつづかない。荒い乱れた呼吸をととのえ、ととのえ一歩一歩踏みしめ、ついにマウント・コロンビアの頂上に立った。好天が幸いし、なによりも頼もしい良い仲間たちに恵まれてのうえだった。キャンプを出てから十時間の苦しい登攀ではあった。山頂からの展望はまさに三六〇度。雪をよせつけない険しい岩壁をむきだし、あるいは針峰を空へつきさし、またあるは白くよそおい、個性的なロッキーマウンテンはつながらつづいてた。その素晴らしい眺めをほしほしにできるのは、山に登る人間に与えられた大きな幸せだろう。

疲労でくたくたになってスキーをあやつるのもやつの思いで夜の八時、テントに帰った。疲労のなかにある確かな充実感。仲間たちへの深い感謝と親類感。十時頃、あたりは暮色につつまれていった。十五時間行動の長い一日も、静かに暮れてゆく。七人の仲間と行動した雪と氷の一週間のなかでの、クライマックスな一日だった。

紅葉の神威岳で

カナダから帰って、紅葉の美しい南日高の神威岳に登った。いまやニシエオマナイの沢深くに林道が延びていて、険阻な函や滝を下に眺めながら、車はこともなしに走り過ぎてしまう。土曜日の午後には札幌を発って林道の終点にキャンプし、その翌日は沢を歩き、急斜面を登って、四時間半くらいで頂上に立っているという、驚くべき近い山になつてしまった。こんなに便利になったことを、はたして喜んでばかりいていいものなのか——日高の山の良さは長いアプローチを重荷に汗して歩き、沢を廻り、滝や函をまき、ブッシュに苦闘して登りえたときに、はじめて本当の山の良さや深さをあじわい、喜びをかみしめることができるのではないのか。開発は安易な便利さを与え、本当の喜

びを奪っていくのではないか——と自問自答しながら頂上に立った。

連休の後の週末のせいかな、一人の登山者にも会わない、静まりかえったその頂には、五年前にソエマツの未踏の直登沢で転落死したN君の銅板があった。若い命を奪ったその深い沢をのぞくと、かすかな水の光があった。ケルンに煙草を供えて、相棒とカメラマン・リードを歌う。風もなく真直ぐに立ち昇ってゆく煙を見つめていると、遠い日の記憶がよみがえってくる……。

カマイエクウチカウシ山のカールにある二つのケルン。九の沢で落石による遭難死をとげたO教授と、冬期ベテガリ岳初登頂をねらうパーテイのユイカクシエサツナイ川での八名もの痛ましい雪崩による遭難。そのなかの一人であったAさんのケルンだった。札内岳を真正面に見渡すその見晴しのいいカールには小さな流れがあり、高山植物が色とりどりに咲くとても美しいところだった。直行画伯とともに訪れた私たちは、神威岳のように煙草を供えてカメラマン・リードを歌ったのだった。あの遠い日は、霧のながれる肌寒い夏の日のことだった……。

N君の眠るこの神威岳の頂からは、南にソエマツ・ピリカヌブリ、北に中の岳・ベテガリが見える。いまは下草が黄色に紅葉して風に波うっているけれど、夏にはどんな花が咲いているのだろうかと思いつつ、目を遠くに向けてと今日までにずいぶんと沢山の命を奪った日高の山なみは青く澄んでいくえにも重なり、はるか遠くへとその連なりを延ばしていった。もう雪のくる日も真近いその山なみには、心うたれる深い静けさがあった。

私がヒマラヤやカナダの山に出かけたとき、もう日本の山は卒業ですか。とか、やはりあちらの山のほうがいいですか——などどたずねられた。山となればべたばれの私には、どの山にもそれぞれに惚れこんでしまつて、山を比較しての冷静な答えなどではきかない。でもふるさとこの山には、暖かなぬくもりを感じる。

今年も山に明け、そしてたぶん山にくれることだろう。いままで心かよわせて訪れた北の山なみには、これからも足しげく登りつづけてゆきたいと思う。これ以上の観光開発とか産業開発などという名目で山がみにくく変貌しないよう、恵み多い豊かな原始がいつまでも思っている北の山であつてもらいたいと、心から願わずにはいられない。